佐倉市飯田中内遺跡出土の資料

四　柳　　隆

1．はじめに

ここに紹介する資料は、昭和63年に当時センターの調査研究員であった渡辺修一氏（現在千葉県教育庁生涯学習部文化課文化財主事）が、当センターの調査補助員の鈴木トヨさん（佐倉市飯田在住）より借り受けたものである。その後の平成5年4月、渡辺氏が異動されるにあたって筆者に取り扱いの依頼があったため、この場を借りて紹介しようというものである。

2．出土地とその環境

佐倉市飯田地区は、印旛沼干拓地にひろがる水田地帯を北に見おろす台地上に集落が形成されており、標高は27～28mを測る。水田面との比高差は25m程である。周辺は印旛沼に流入する小河川によって複雑に開析されており、樹枝状の小支谷が台地の奥深くまで入り込んでいる。飯田地区の集落はこうして形成された舌状台地の先端付近に営まれ、京成佐倉駅から約3kmと交通至便な地で

第1図　遺跡の位置　　（1：25,000）

第2図　出土地と隣接する遺跡（1：5,000）

あるが比較的開発の手は及んでおらず、周辺にはのどかな農村の風景が展開している。

千葉県埋蔵文化財分布地図(1)によると、飯田地先には6ヶ所の遺跡が所在する。年代順にみると、縄文時代早期の斜面貝塚である三ケ月山貝塚、古墳時代後期から平安時代の遺物を出土する飯田長作遺跡及び飯田中内遺跡、すでに消滅してしまっているが中世城館跡である下山砦跡、飯田1・2号墳と呼ばれている2基の塚である。

飯田中内遺跡とこれに隣接する同時期の飯田長作遺跡は現状では一部が宅地となっているが、その大部分は畑地で地表面には土師器を中心に大量の遺物が散布している。分布地図では両遺跡とも散布地となっているが、その立地や遺物の散布状況から判断すると、連続する大規模な集落遺跡である可能性が極めて強いと思われる。鈴木さん宅は遺跡周知範囲には含まれていないが、この遺跡内にあるといってもよかろう。

3．出土の状況

鈴木さん宅は飯田中内遺跡の周知範囲の西端からさらに150mほど西寄りにある(第2図の網掛け部分)。今回お借りした資料は、鈴木さんが自宅の庭に収穫したサトイモを貯蔵するための穴を掘った際に出土したものである（第2図の星印付近)。鈴木さんの話によると掘削した深さは約1mで、ハードロームをも削っていたようである。地表から50～60cmが黒色土、それ以下が赤土だったということである。

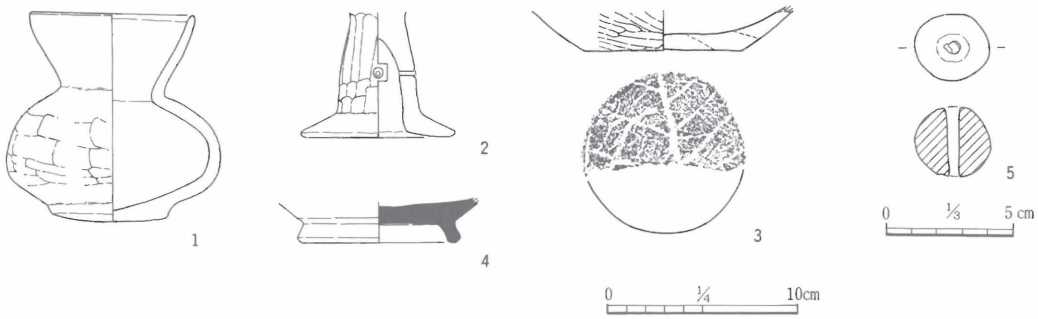
なお今回は実見する機会を得られなかったが、鈴木さん以外にも両遺跡内やその周辺にある畑での耕作中に出土した資料をお持ちの方が多数いらっしゃるということである。それらの中には完形で遺存しているのものも多数含まれているとのことであった。

4．出土遺物

今回お借りした資料は、第3図に示した5点の遺物及び土師器や須恵器の実測できない小破片数点である。

1は土師器の坩である。口径8.5cm、胴部最大径11.2cm、器高は10.9cmを測る。外面の器壁全体及び口辺部の内面は丁寧なナデによって整形されているが、球状を呈する胴部の最も膨らむ部分にはヘラケズリの痕跡を観察できる。底面はヘラケズリのみで、ナデられていない。外面全体と内面の頸部の稜以上の部分には赤彩が施されている。当資料は5世紀代後半の所産と思われることから、遺跡の起源は分布地図に示された年代、すなわち古墳時代後期を遡る可能性が強い。

2は土師器の高坏の脚部である。坏部は欠損している。脚部はあまり開かずに中位がやや膨らむ形態を呈し、最も膨らむ部位には2ヶ所の孔が穿たれている。この孔はいわゆる透かし孔とは異なり、直径2㎜ほどの細い棒状の工具を2孔とも一気に貫通させたもので、径は小さいながら一方から他方を見通すことができる。なお、この孔は正中線とはややずれた位置に開けられている。脚裾は大きく開いており、底径は8.2cmを測る。脚部外面は縦方向のヘラケズリ、脚裾は内外面とも丁寧なナデで整形されている。坏部と脚部はホゾを切って接合された痕跡が残っている。脚部の形態や坏部と脚部の接合方法の特徴から1に示した坩と概ね同時期であろう。



第3図　出土遺物

3は土師器の甕のものと思われる底部破片である。底径は8.2cmを測る。胴下部の整形はヘラミガキで、底面には木葉痕がみられる。これらの特徴から古墳時代後期のいわゆる常総型と呼ばれている甕であろうと思われる。焼成は極めて良好である。破片外面はススの付着が顕著で、黒色を呈している。

4は須恵器の高台付坏の底部破片である。底径は7.9cmを測り、比較的大きいといえる。胎土中に雲母粒や長石粒を大量に含んでいることから常陸（新治か？）産のもので、8世紀後半の所産であるものと思われる。

5は土師質の土玉である。整形は全体に粗雑で、孔の周辺をやや平坦にしているにとどまる。穿孔によってめくれ上がった粘土も除去せずに、そのまま焼成している。孔は2～3度にわたって穿たれているため、横断面は凹凸が激しい。

これら5点の他に含まれていた土師器や須恵器の小破片も、古墳時代中期から平安時代にかけての所産のものに限られる。

5．成　果

今回お借りした資料とその紹介に伴って実施した若干の調査によって得られた成果として次の2点が挙げられる。

第1点は遺跡の性格についてである。佐倉市飯田地区は市街化調整区域であることもあって比較的開発の遅れている地域である。飯田地先内の遺跡についても昭和24年に三ヶ月山貝塚の学術調査が行われた(註1)他には調査の手が及んでいない。そのためか飯田長作遺跡、飯田中内遺跡ともに散布地として把握されるにとどまっていたが、その立地条件や遺物の散布状況、さらに耕作によって出土した資料等のことを考えあわせるとこの地の地表下に大規模な集落遺跡が展開している可能性が極めて強いといえる。慎重な取り扱いが要求されるところである。

第2点としては遺跡の営まれた時期に関する問題が挙げられる。これまでは古墳時代後期から平安時代に限られる遺跡とされてきたが、飯田中内遺跡の隣接地にある鈴木さん宅の庭から得られた資料の中には明らかに古墳時代中期まで遡るものが含まれている。少なくとも飯田中内遺跡については古墳時代中期から集落が営まれていた可能性が強いといえる。飯田長作遺跡についても両遺跡のあり方から同様と思われるが、この点についてはさらに詳細な分布調査を実施することが必要であるといえよう。

おわりに

今回の報告にあたって、資料の提供者である鈴木トヨさんをはじめ当センター印旛班の調査補助員の皆さん、及び佐倉分室の内勤調査補助員の皆さんには取材や調査に対し多大なる御協力を賜った。記して感謝の意を表します。

また、資料の取り扱いや年代観については渡辺修一氏及び佐倉分室の金丸　誠氏（現在君津郡市文化財センター）、山口典子氏、糸川道行氏に様々な御教示を賜った。末筆ながら感謝の意を表します。

註

1　昭和24年　中川中学校社会部により2地点の斜面貝塚の調査が実施され、鵜ケ島台式、茅山上層式土器とともにハイガイ、アサリ、ハマグリ等の貝類が出土している。

参考文献

中川中学校校友会社会部
「佐倉町飯田三ケ月山貝塚発掘報告書」　1950

千葉県教育委員会
「千葉県埋蔵文化財分布地図（1）」
－東葛飾・印旛地区－　1987